

東邦大学学術リポジトリ



OPAC

東邦大学メディアセンター

タイトル	第69回東邦医学会総会 シンポジウム:ユース世代に対する包括的なメンタルヘルスケア:東邦大学における取り組み 認知機能と社会機能の改善により,就労への道が開けた統合失調症の1例
別タイトル	69th Annual Meeting of the Medical Society of Toho University Symposium: Integrated mental health care for youth generation in Toho University Omori Hospital A case of schizophrenia succeeded in working by improving cognitive functioning and social functioning
作成者(著者)	石井, 絢子 / 舩渡川, 智之 / 大迫, 加奈 / 根本, 隆洋 / 水野, 雅文
公開者	東邦大学医学会
発行日	2016.09
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 63(3). p.192 194.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	総説
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2016.r038
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD66362026

総説

ユース世代に対する包括的なメンタルヘルスケア—東邦大学における取り組み—

認知機能と社会機能の改善により、 就労への道が開けた統合失調症の1例

石井 絢子¹⁾ 船渡川智之¹⁾ 大迫 加奈²⁾
根本 隆洋¹⁾ 水野 雅文¹⁾

¹⁾東邦大学医学部精神神経医学講座 (大森)

²⁾東邦大学医療センター大森病院看護部

要約：統合失調症は幻覚妄想を主徴とし、高校生や20歳代といった思春期・青年期前期を好発年齢とする精神疾患であるが、長期的な転帰には認知機能障害やそれに基づく社会機能障害が深く関与することが知られている。疾患の早期段階である初回エピソードにおいても、潜行性の発症形式を有する症例では、認知機能や社会機能の障害の改善は容易ではない。今回は、潜行性発症で陰性症状を主体に経過していた統合失調症患者が、薬物療法と併せて、東邦大学医療センター大森病院精神神経科のデイケア「イルボスコ」へ通所することにより、精神症状、認知機能、社会機能が改善し、就労への糸口を得た症例を報告する。本例を通して、潜行性発症例であっても病期や年齢特性に充分留意した集中的な心理社会的治療を行うことで、速やかに就労などの社会参加に導きうることが示唆された。

東邦医学会誌 63(3)：192-194, 2016

KEYWORDS : schizophrenia, early intervention, first episode

統合失調症は幻覚妄想を主徴とし、高校生や20歳代といった思春期・青年期前期を好発年齢とする精神疾患である。この時期は成長・教育の過程にある重要な時期に相当し、患者が社会から分断されないように、そしてより健康な成長・教育を支援するという意味で、より早期に適切な介入を行う必要がある。また、本疾患の長期的な転帰には、認知機能障害やそれに基づく社会機能障害が深く関与することが知られている。東邦大学医療センター大森病院精神神経科(当科)のデイケア「イルボスコ」では、発症5年以内の初回エピソード統合失調症および、その前駆期に相当する精神病発症危険状態 (At-Risk Mental State : ARMS) の15~30歳の若者を対象とし、就学、就労などの社会復帰を目指した包括的かつ集中的な心理社会的治療を行っている¹⁻³⁾。本稿において、イルボスコを利用したことで陰性症状、認知機能障害の改善を認め、福祉就労として社会復帰の糸口をつかんだ統合失調症の1例の治療経過を報告する。

症 例

イルボスコ利用登録時19歳、男性。

生活歴：長崎県で出生、同胞3名中第2子であり、一卵性双生児として出生した。両親に養育され、発達発育に異常は認めなかった。

既往歴：スティーブンス・ジョンソン症候群 (17歳)。

主 訴：「皆が悪口を言って辛い」

現病歴：X-4年頃より質問への返答が遅くなったことに母が気付いた。X-3年4月高校進学後、周囲の視線を気にするようになった。また、自身の容姿を批判する幻聴を認めるようになり、「嫌われている」と感じ友人を作れなかった。X年4月大学へ入学したが、人の視線が気になり通学できなかった。同年7月からは外出もせず、同年11月から夜も眠らず独語を認めるようになったため、両親に連れられ同年12月当科受診。自身を批判する幻聴、「やく

1, 2) 〒143-8541 東京都大田区大森西6-11-1
受付：2016年2月12日
DOI: 10.14994/tohoigaku.2016.r038

東邦医学会雑誌 第63巻第3号、2016年9月1日
ISSN 0040-8670, CODEN: TOIZAG

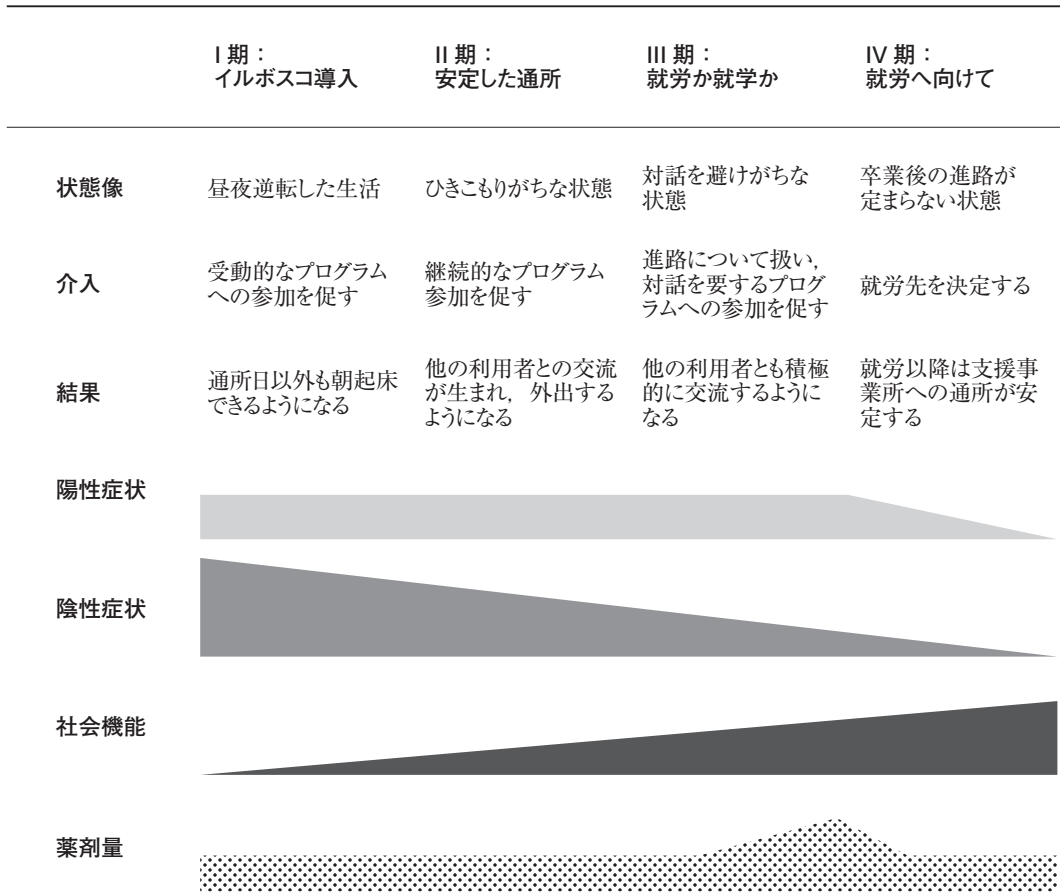


図1 デイケア導入後の継時的変化
イルボスコ：東邦大学医療センター大森病院精神神経科のデイケア「イルボスコ」

ぎに狙われている」といった被害妄想を認め、統合失調症の幻覚妄想状態であると診断され、同日当科に医療保護入院した。薬剤調整を行い、幻覚妄想は改善したが、自発的な発語や会話の広がりには乏しく無為自閉な状態が続いた。このため、退院後の日中の活動の場および今後の社会復帰を見据えたりハビリテーションを目的に、イルボスコの利用を入院中より試験参加として開始した。数回の参加の後、X+1年3月に退院した(図1)。

第I期：イルボスコ導入期 (X+1年3~9月)
(昼夜逆転した生活)

退院後、精神症状としては、幻聴の頻度や内容は減少していたものの続いており、陰性症状として無為自閉も顕著であった。発語も乏しく、会話の広がりには欠如し、認知機能検査上でも言語流暢性の低下を認めた。また、朝起きることができず昼に起床していた。このため、目標を“生活リズムの確立”“イルボスコの環境に慣れること”とし、イルボスコへの通所の頻度は入院中の試験参加の状態を参考に週1回から開始した。通所開始直後の本人は、無為自閉の強さから、自主的な行動には結び付かず、受動的に行うことができるデイケアプログラムのみでの参加にとどまっ

た。しかし、通所開始3カ月後頃より通所に慣れ、母同伴での通所から自力での通所が可能となった。次第に通所日以外の日も朝起きることができるようになり生活リズムの改善を認めた。また、イルボスコでの昼休憩時間に昼食をとり近隣の飲食店まで出かけるなど外出範囲の拡大も認めた。第I期の介入を通じて、本人の生活リズムは徐々に改善され、通所への抵抗感も減った。

第II期：通所安定期 (X+1年9月~X+2年1月)
(ひきこもりがち)

第II期当初は、週1日のイルボスコへの通所以外の外出をすることはなかった。このため目標は、週3日の通所へ段階的に増やすこととした。まず、受動的に行うことができるプログラムから、創作やスポーツといった、より主体的な要素を含むプログラムにも参加を促した。当初、通所の頻度が増えることに本人は抵抗を示し、通所増加時には一時的に幻聴の悪化を認めた。このため、通所を増やすペースも本人の状態を確認しつつ、緩やかに行うこととした。継続して同一プログラムに参加することで、同じプログラムに参加する他の利用者とな少ないながらも会話が生まれ、次第に仲の良い友人ができ、プログラム終了後のミー

ティングでは発言することが増えた。3カ月程経過した時点で、週3日の通所を安定して通えるようになった。自宅でも家族と一緒にではあるが休日に買い物へ出かけるなど無為自閉状態の改善が認められた。第II期の介入を通じて、プログラム自体の取り組みへも、他の利用者との関わりについても自主性が増した。

第III期：就労か就学か（X+2年1～12月）

（対話を避ける）

第III期当初は、週3日のイルボスコへの通所が支障なく可能であったが、対話を要するプログラムへの参加を避け、イルボスコ卒業後の進路を意識する様子もなかった。このため、この時期の目標は、イルボスコ卒業後の進路についての意識付けを行うこととした。まず本人および家族とともに卒業後の進路について話し合いの場を持った。本人はスーパーマーケットでのアルバイトなどへの就労を希望する一方、両親は大学への復学を勧めており、意見が一致しなかったため個別面談で進路についての話し合いを定期的に扱うこととした。プログラムにおいても、就労を念頭に置いた場合は対人関係技能の向上が必要であることから「社会的認知ならびに対人関係のトレーニング（Social Cognition and Interaction Training：SCIT）」や、自身の興味を持っていることを発表する「みんなの時間」への参加を促した。その結果、SCITでも口数は少ないながら意見を述べるようになり、利用者同士のミーティングでも司会などの役割を積極的に引き受けるようになった。また、「みんなの時間」では自身の趣味である“飲食店巡り”の結果を地図に示して発表し、その後、昼食の時間に本人お勧めの店に利用者と連れ立って出かける姿が見られるようになった。認知機能ドリルでも得点が上がリ、認知機能検査の改善も認めた。第III期の介入を通じて、イルボスコ卒業後の進路を意識付けたことで、意見交換を要するプログラムへの参加が可能となり、認知機能ならびに対人関係技能を含んだ社会機能の改善が得られた。

第IV期：就労へ向けて（X+2年12月～X+3年3月）

（将来の目標が定まらない状態）

第IV期当初は、イルボスコ卒業後の進路は決定されていなかったため、卒業後の進路の具体的な内容の決定とそれに向けた準備を行うことを目標とした。本人の希望や、現状の本人の精神症状、認知機能、作業能力を総合し、就学よりも、就労の方向に進むこととした。就労先も負荷が高いと思われる一般就労よりも、技術の指導も受けられる就労移行支援事業所などの福祉就労が望ましいことを本人および家族とも共有した結果、卒業後は福祉就労を目標とすることで意見が一致した。イルボスコのスタッフと共に候補となる施設を見学したところ、就労移行支援事業所「ジョブサ」が基本的な接客技術の訓練を行っているという点で本人の希望に合致しているため、本人も通所を希望した。「ジョブ

サ」担当者との初回面接時にはイルボスコスタッフも同伴し、より密な連携を図った。週1日より「ジョブサ」の通所を開始したことで、その分イルボスコの通所日数は減少するが、イルボスコで過ごす時間を本人のリラックスできる時間にしていくなど、通所場所を移行していくにつれて生じる本人の負担感の軽減を図った。本人は「作業に集中していると、幻聴が聞こえなくなる」と「ジョブサ」通所へ前向きな姿勢を見せた。「ジョブサ」へ通所しても、症状の悪化はなく過ごすことができたため、X+3年3月イルボスコを卒業とし、その後も「ジョブサ」への通所を継続した。

考 察

陰性症状主体で経過していた統合失調症患者が、薬物療法と併せて、イルボスコへ通所することにより、精神症状、認知機能、社会機能が改善し、就労への糸口を得た1例を報告した。伊藤ほかは、初回エピソード統合失調症の潜行性発症例では、精神病未治療期間（duration of untreated psychosis：DUP）の長さや陰性症状の重さが、18カ月後の認知機能障害の重症度を予測する因子であると報告している⁴⁾。本症例においてもDUPは3年であり、その1年前に陰性症状が始まっていることから潜行性発症例に相当する。このため本例の認知機能の改善は決して容易でないことが予測された。イルボスコにおいて、同世代の他の利用者とイルボスコ外でも交流することで、本来誰もが体験するような社会的経験を重ねることができたことなどが効果的に作用し、陰性症状、認知機能のみならず社会機能の著明な改善が得られ、就労への道が開かれたと考えられる。

結 語

早期精神病やその年齢特性に十分な配慮がなされたイルボスコでの心理社会的治療により、認知機能のみならず社会機能の改善が得られ、そして就労への道が開けた潜行性発症の初回エピソード統合失調症の1例を報告した。至適で集中的な心理社会的治療を行うことで、諸機能の改善が困難な潜行性発症例においても、本人が望む社会参加が実現可能であることが示された。

文 献

- 1) Mizuno M, Suzuki M, Matsumoto K, et al: Clinical practice and research activities for early psychiatric intervention at Japanese leading centres. *Early Interv Psychiatry* 3: 5-9, 2009
- 2) 船渡川智之, 根本隆洋, 武士清昭, ほか: デイケア施設を活用した包括的早期介入の試み—イルボスコ. *精神誌* 115: 154-159, 2013
- 3) Nemoto T, Funatogawa T, Takeshi K, et al: Clinical practice at a multi-dimensional treatment centre for individuals with early psychosis in Japan. *East Asian Arch Psychiatry* 22: 110-113, 2012
- 4) Ito S, Nemoto T, Tsujino N, et al: Differential impacts of duration of untreated psychosis (DUP) on cognitive function in first-episode schizophrenia according to mode of onset. *Eur Psychiatry* 30: 995-1001, 2015